76 歳のムーティが 5 度目の登場で、伝統的なニューイヤーを！

若宮 由美（op.257）

ムーティが 5 度目の登場。2 曲以外の全部をシュトラウス家の作品で演奏します。バレエは 2015 年にも演出を担当したボンバーナが担当。〈シュテファニー・ギャロップ〉では、死後 100 年を迎える建築家のオットー・ヴァーグナー（1840〜1918）を称えてパ・ド・ドゥが踊られます。

ヨハン・シュトラウス 2 世：オペレッタ《ジプシー男爵》から〈入場行進曲〉

Johann Strauss (Sohn) : Einzugsmarsch aus der Operette *Der Zigeunerbaron*

ヨハン・シュトラウス 2 世（1825-99）による 11 作目のオペレッタ《ジプシー男爵》は、18 世紀初頭のハンガリーを舞台にした劇作品です。1885 年 10 月 24 日、すなわち 2 世の 60 歳の誕生日前日にアン･デア･ウィーン劇場で 2 世の指揮で初演しました。この行進曲は第 3 幕冒頭でスペイン継承戦争から帰還する勇敢な士たちが登場する場面の音楽です。トランペットの高らかなファンファーレに続いて、活気あふれる旋律が意気揚々と演奏されます。行進曲の演奏会での初演は、12 月 6 日にエドゥアルト・シュトラウス（1835〜1916）の楽友協会における日曜コンサートで行われました。日曜コンサートでは、聴衆が円形のテーブルで音楽を味わいました。

ヨーゼフ・シュトラウス：ワルツ〈ウィーンのフレスコ画〉op.249

Josef Strauss: *Wiener Fresken,* Walzer, op. 249

1868 年 7 月にウィーンの人びとは国際射撃協会主催によるプラーターの大射撃祭で溢れかえっていました。そこではシュトラウス家も新作が披露され、ヨハン 2 世が活気あふれるポルカ〈百発百中〉を、ヨーゼフが〈射撃手行進曲〉op.250 を、さらに 3 人兄弟による共作〈射撃手カドリーユ〉を発表しました。しかし、これにヨーゼフ・シュトラウス（1827〜70）は満足せず、7 月 28 日のフォルクスガルテンで開かれた「祝祭コンサート」において、このワルツを初演しました。題名は、ウィーンの空にそびえる宮殿や貴族の館を飾る、高価な壁画を表しています。彼の音画的才能が表現されています。

ヨハン・シュトラウス 2 世：ポルカ〈花嫁さがし〉op.417

Johann Strauss (Sohn) : *Brautschau,* Polka française, op. 417

この楽曲も《ジプシー男爵》に関連する一曲。ハンガリー人の豚飼いジュパーンが「そうさ、読み書きは苦手だった」と歌うクプレが、1885 年 11 月 29 日の日曜コンサートで同ポルカに引用されています。歌の中で、ジュパーンは「私の理想的な人生の目的は豚とベーコン」と歌うのですが、この役を演じたアレクサンダー・ジラルディ（1850〜1918）は 3 回も歌わなければなりませんでした。しかし、この歌は花嫁さがしとは関係なく、〈ハンガリー軽騎兵のポルカ〉op.421 に登場する合唱曲の方が「花嫁さがし」という題名にぴったりです。しかし、聴衆は作曲家のジョークと捉えたのでしょう。

ヨハン・シュトラウス 2 世 : ポルカ・シュネル〈心うきうき〉op.319

Johann Strauss (Sohn): ***Leichtes Blut*****, Polka schnell, op. 319**

1867 年 3 月 10 日はこの年の四旬節第一日曜日であり、この日はシュトラウス 3 兄弟がこの年の謝肉祭で初演した楽曲をすべて演奏するならわしでした。この年は 24 曲の新作を用意し、ヨハン 2 世、ヨーゼフ、エドゥアルトがそれぞれ 8 曲ずつを作曲しました。ところが、ヨハンには来るべき夏にパリで聴衆を盛り上げるために、速いポルカがもう 1 曲ある方がよいという意見により、ヨーゼフの〈冗談ポルカ〉op.216 に似た曲を仕上げ、この演奏会で初披露しました。

ヨハン・シュトラウス 1 世 :〈マリアのワルツ〉 op.212

Johann Strauss (Vater): ***Marienwalzer*****, op. 212**

1846 年 10 月 1 日にヨハン・シュトラウス 1 世（1804〜49）は、楽園小庭園（フォルクスガルテンの一部で、現在ブルク劇場のあるところ）で祝祭を大成功させ、その再上演を企画します。しかし、天候の心配はありました。2 度の延期を経て、7 月 20 日に夏祭が開催されます。前宣伝が高かったワルツの初演を見逃したくはない大勢の客が集まりました。何度目かのアンコールの後で、突然空から雨が降ってきました。向かいにあったコーヒー店のペーター・コンティは、さほど困った雰囲気ではなかったといいます。マリアは当時ウィーンに最も多い名まえでした。

ヨハン・シュトラウス 1 世 :〈ヴィルヘルム・テル・ギャロップ〉 op.29b

Johann Strauss (Vater): ***Wilhelm Tell-Galopp*****, op. 29b**

ロッシーニ（1792〜1868）のオペラ《ヴィルヘルム・テル（原題仏語 : ギヨーム・テル）》がパリで初演されたのは、1829 年 8 月 3 日王立音楽アカデミーにおいてでした。そのオペラがウィーンの宮廷歌劇場で初演されるのは、翌年 1830 年 6 月 25 日です。ギャロップは序曲のうち、第 4 部〈スイス軍隊の行進〉の有名な旋律を引用したものです。オペラがウィーンで上演されるよりも早く、1829 年のうちに演奏されました。というのは、ギャロップの初版譜（ピアノ版）がハスリンガー社に 1829 年 11 月に出されているからです。

フランツ・フォン・スッペ : オペレッタ《ボッカチオ》序曲

Franz von Suppé: Ouvertüre zur Operette ***Boccaccio***

スッペ（1819〜95）は「オペレッタの父」とも呼ばれる作曲家。このオペレッタは、1879 年 2 月 1 日にウィーンのカール劇場で初演。14 世紀のイタリア（フィレンツェ）を舞台にした『デカメロン』を使用し、デカメロンの有名な詩人ジョヴァンニ・ボッカチオ（1313〜75）がここでも愛の詩を書くことになります。ボッカチオ役は女声が演じることも多く、マリー・ガイスティンガー（1836〜1903）が話題をさらいました。日本では 1915 年に帝国劇場で翻訳上演され、ローヤル館や浅草オペラでも頻繁に上演されました。

ヨハン・シュトラウス 2 世 : ワルツ〈ミルテの花〉 op.395

Johann Strauss (Sohn): ***Myrthenblüten*****, Walzer, op. 395**

2018 年はハプスブルク家の皇太子ルドルフ（1858〜89）の生誕 160 年を祝すために、この曲と次の曲が演奏されます。1880 年 3 月にウィーン宮廷は、皇太子ルドルフとベルギー王

家の娘シュテファニー（1864～1945）がブリュッセルで婚約したと報じました。すぐさまウィーンの地方行政局は祝賀の催しのために、ヨハン・シュトラウスに作曲を依頼しました。しかし、結果的にウィーンの市議会議員達は大きな催し物を取りやめたため、ヨハンはウィーン男声合唱協会の依頼曲に切り替えます。歌詞はザイフェルト（1844～1904）が担当しました。〈ミルテの花束〉であった題が、〈ミルテの花〉に改題されます。初演は 1881 年 5 月 6 日に楽友協会で行われたドレス・リハーサル（オーケストラ伴奏）で、一般向けには 5 月 8 日にプラーターで開催されたフォルクスフェストで指揮者ヨハン 2 世が演奏し、2 万人が集いました。合唱にヘッセン大公レオポルト 4 世の歩兵連隊が伴奏をしました。しかし、当の皇太子夫妻と皇帝フランツ・ヨーゼフ 1 世（1830～1916）はプラーターに向かう人びとの渋滞に巻き込まれて、演奏を聴けませんでした。

アルフォンス・ツィブルカ：〈シュテファニー・ギャロップ〉op.312
Alfons Czibulka: *Stephanie-Gavotte*, op. 312

ツィブルカ（1842～94）は、ニューイヤー初登場となるハンガリー人の音楽家。オーストリア帝国のキルヒドラウフ（現在はスロヴァキア：シピシュスケー・ポドフラディエ）に生まれ、ウィーンに没しました。若い頃にはスッペの下でカール劇場の第 2 作曲家を務めましたが、その後は軍楽隊に入り、各地を転々とし、ベルギーにも赴任しました。この曲も皇太子ルドルフとベルギー王女ステファニーの婚礼に際して作られた曲で、1881 年 5 月 10 日に結婚式は行われ、花嫁に献呈されました。

ヨハン・シュトラウス 2 世：ポルカ・シュネル〈百発百中〉op.326
Johann Strauss (Sohn): *Freikugeln*, Polka schnell, op. 326

1868 年 7 月 27 日にヨハン 2 世によりプラーターのフェストハレで開催された「第 3 回ドイツ連邦射撃競技会」のために作曲され、ミュラー（1839～1901）のオペレッタ《ウィーン気質》にも用いられました。ドイツ語の”Freikugeln”という題名はウェーバー（1786～1826）の《魔弾の射手 Der Freischütz》に由来します。「魔弾の射手」の扱う「弾」にあたります。2 年前の普墺戦争では、先込め銃を使用していたオーストリア軍に対して、プロイセン軍は元込め銃を使っており、性能は雲泥の差でした。その弾を「百発百中」と念じたのでしょうか。新聞には一言の触れられていないものの、シュトラウス楽団のホルン奏者フランツ・サヴァイの日記には、新しいポルカがこのイヴェントで演奏されたと書いています。

ヨハン・シュトラウス 2 世：ワルツ〈ウィーンの森の物語〉op.325
Johann Strauss (Sohn): *Geschichten aus dem Wienerwald*, Walzer, op. 325

1868 年 6 月 19 日にフォルクスガルテンで初演された、ヨハン 2 世によるレントラー風の演奏会用ワルツ。踊るためのワルツではなく、聴くためのワルツとして作曲されました。19 世紀には街中の喧騒を逃れ、ウィーンの森に散策にでかけるのが、ウィーン子の楽しみでした。ウィーン周辺の小さな町や村の音楽が取り入れられ、序奏とコーダには民族楽器のチターが登場します。この楽器は弦をはじいて演奏しますが音量が小さいので、弦楽器で演奏することも多々あります。同じ演奏会では、まだウィーン上演されたことのないヴァーグナーの《ニュルンベルクのマイスタージンガー》（1868）も演奏されました。初演の数日後には、ウィーン男声合唱協会がヒーツィングの「ノイエ・ヴェルト」で合唱版を上演しています。ただし、ヨハン 2 世は根っからの都会人であり、田舎や自然が大嫌いでした。

ヨハン・シュトラウス 2 世 :〈祝典行進曲〉 op.452

Johann Strauss (Sohn): *Fest-Marsch,* op. 452

ヨハン・シュトラウス 2 世は 3 度目の結婚をするにあたって、2 度目の妻アンゲリカ・ディトリヒ（1850～1919）が生きていることを理由に、カトリックであるウィーンを捨てました。カトリックでは妻が生きている間は結婚ができなかったからです。そこで 1887 年にドイツのコーブルクに行き、プロテスタントに宗旨変えしてアデーレ・ドイチュ（1856～1930）と結婚します。その際、コーブルクで知り合ったのが花婿となるフェルディナンド（1861～1948）です。後に、ブルガリア侯となったフェルディナンドとブルボン・パルマ家出身のマリー・ルイーズ（1870～99）の結婚を記念して、同曲と〈婚礼の踊り〉op.453 を作曲し、前者を花婿に、後者を花嫁に献呈しました。その結婚式は 1893 年 4 月 20 日に花嫁の先祖伝来であるイタリアのピアノラ邸で行われました。この曲の初演は、ウィーンのプラーターにあるロトゥンデで開催された「モンスター・コンサート」で、1 万人の聴衆を集め、ウィーンに駐留する軍楽隊員約 500 名がアロイス・クラウス（1840～1923）の指揮で演奏しました。オーケストラ版は 11 月 12 日のエドゥアルトによる日曜コンサート（楽友協会）で初めて演奏されました。

ヨハン・シュトラウス 2 世 : ポルカ・マズルカ 〈町と田舎〉 op.322

Johann Strauss (Sohn): *Stadt und Land*, Polka mazur, op. 322

1867 年はパリ万博で名声を得ようと、ヨハン 2 世は単身パリへ乗り込み、ドイツのビルゼ楽団（のちのベルリン・フィル）を指揮してセンセーションを巻き起こしました。シュトラウスに心酔したイギリス皇太子（後の国王エドワード 7 世、1841～1910）の招きで、ヨハンは妻ヘンリエッテ・トレフツ（1818～78）とともにイギリスへと足を延ばします。ロンドンで 2 ヶ月間にコヴェント・ガーデンで 60 回以上のコンサートをこなす忙しさでしたが、郊外の長閑な環境に魅せられたといいます。帰郷した 2 世はヒーツィングに居心地のよいヴィラを購入しました（ここで後に《こうもり》を作曲）。同曲は、イギリスの大都会とトリオでは奏される田舎風のレントラーが田舎を想起させます。1868 年 1 月 12 日にウィーンの環状道路沿いに建てられた造園協会で初演されました。

ヨハン・シュトラウス 2 世 : カドリーユ 〈仮面舞踏会〉 op.272

Johann Strauss (Sohn): *Un ballo in maschera*, Quadrille, op. 272

カドリーユはヨハン・シュトラウス 1 世がフランスから持ち帰った曲種で、短い 6 曲を連ねるのがウィーンの特徴でした。題材はオペラなどのモティーフを用いるものです。度重なる検閲を経てから 1859 年 12 月 21 日にローマのアポロ劇場で初演されたヴェルディのオペラ《仮面舞踏会》が、ウィーンで上演されるのは 1867 年 4 月 1 日ウィーン宮廷歌劇場ですが、それよりも 5 年前の 1862 年 12 月 21 日に同カドリーユはフォルクスガルテンで先駆けて演奏されました。しかも、それが初演ではなく、ヨハン 2 世の指揮でロシアのパヴロフスクで演奏していました。小姓オスカルのカンツォーネなどが取り上げられています。

ヨハン・シュトラウス 2 世：ワルツ〈南国のばら〉op.388

Johann Strauss (Sohn): ***Rosen aus dem Süden*****, Walzer, op. 388**

ヨハン・シュトラウス 2 世は、1880 年 10 月 1 日に 16 世紀のスペインの作家セルバンテスを題材にした、8 作目のオペレッタ《女王のレースのハンカチーフ》をアン・デア・ウィーン劇場で初演しました。ポルトガルが舞台です。「オペレッタは忘れ去られ、ワルツだけが大喝采を浴びた」と言われてきましたが、2006 年に『新全集』が刊行され、同年コーブルクで復活上演された後、2007 年からはドレスデン・オペレッタ劇場で公演が続けられています。ワルツ〈南国のばら〉は、80 年 11 月 7 日の楽友協会での日曜コンサートで演奏され、賞賛を浴びました。序奏と第 2 ワルツに引用されたロマンツェ〈野ばらの咲くところ〉（セルバンテスが歌う抒情的な歌）が曲名の由来と考えられています。同曲には第 1 幕の王様の「トリュフ・クプレ」も使われています。後に、イタリア王ウンベルト 1 世（1844～1900）に献呈されています。

ヨーゼフ・シュトラウス：ポルカ・シュネル〈投書欄〉op.240

Josef Strauss: ***Eingesendet*****, Polka schnell, op. 240**

1868 年 2 月 4 日にゾフィーエンザールで新聞記者と作家による協会「コンコルディア」の舞踏会が開かれました。シュトラウス家の 3 兄弟は、兄ヨハンが〈ジャーナリスト〉op.321、末弟エドゥアルトがポルカ・フランセーズ〈追伸〉op.35、そしてヨーゼフが〈投書欄〉を初演しました。なかでも、ヨーゼフの同曲は、シュトラウス家の「謝肉祭論表 1868」と銘打ったシュピーナ社の楽譜としても、兄の軽快なポルカ・シュネル〈雷鳴と稲妻〉op.324 とともに大成功を収めました。